15　オリーブの生産振興

■　管内オリーブ生産者およびオリーブ栽培志向農業者　■

（西讃農業改良普及センター　果樹経営担当　○神余暢一、糸川桂市）

●対象の概要

三豊市西部の仁尾町では古くからカンキツやビワなどの栽培が盛んで、曽保地区では越冬完熟みかんの「ふるーつ物語」などのブランドを確立している。また、三豊市東部の高瀬町もモモなどの栽培が盛んな地域で、「なつおとめ」「はなよめ」「夢浅間」などの新品種の導入にも積極的に取り組んでいる。しかし、近年、生産者の高齢化や後継者の不足などから耕作放棄地が拡大しており、病害虫や鳥獣被害の発生源となって周辺ほ場での果樹栽培に影響をおよぼすようになってきた。

このため、普及センターでは農業生産流通課、農業試験場小豆オリーブ研究所、三豊市などの関係機関と協力して、省力的に栽培できる新たな品目として、近年、国産品の需要が伸びているオリーブを、平成22年度から制定された県の「オリーブ生産拡大推進事業」などを活用して、主に耕作放棄地を中心に推進してきた。

その結果、平成22年度には仁尾オリーブ生産組合（組合員：12名）と高瀬オリーブ生産組合（組合員：6 名）が設立されてオリーブ栽培が始まった。

また、平成24年度には小豆島でオリーブ栽培を行い６次産業化にも取り組んでいる農業生産法人株式会社アライオリーブ（１社）が高瀬町に進出してオリーブ栽培を開始している。

●課題を取り上げた理由

これまでに西讃普及センター管内ではオリーブが栽培さたことがなかったため、栽培方法、果実品質、加工・販売方法などの情報がほとんどない状態であった。

また、オリーブは加工が必要なため他の果実のように市場出荷の流通は一般的ではない。生産量が増加するまでは加工業者への販売が前提となるため、加工業者の求める果実品質や収穫時期・出荷量などについて、事前に協議しておく必要があった。このため各生産組合にオリーブ栽培の情報提供を行い、加工業者との商談も進めながらオリーブの生産振興を行う必要があった。

●普及活動の経過

1　普及センターでは関係機関と連携して様々な取り組みを行った。

平成22年５月19日に三豊市役所でオリーブ振興施策などについての「オリーブ栽培説明会」に出席し、関係機関との連携を図った。

2　オリーブ栽培意向者に栽培方法や補助事業での支援内容などを周知し、植栽予定地の現地調査の状況を元に土壌改良などについて植栽前の栽培指導を行った。

3　開花期や収穫期などには生産者らと合同で現地巡回を行い、着花状況や収穫前の栽培管理、病害虫防除などについての指導を行ってきた。

開花期に降雨が少なかった場合には受粉と着果安定のための潅水の周知を、降雨が多かった場合には炭疽病の応急防除の周知も適時行った。

4　㈱アライオリーブの参入にあたっては、平成24年8月17日と12月６日に三豊市と連携して植栽予定地周辺の高瀬町原下地区のモモ生産組合員への説明会に参加し、農地の貸借条件などの説明とあわせてオリーブとモモ相互への農薬飛散防止対策の必要性など栽培面についての情報提供を行った。

5　平成24年3月にはオリーブ栽培の新技術を実証するため、県立笠田高等学校の協力を取り付けて農場の一部に「香川県オリーブ栽培実証ほ」を設置した。

この実証ほでは３品種（ミッション、ネバディロ・ブランコ、ルッカ）を合計 10 本植栽して、①防草シート（タイベック）と点滴自動潅水方式を組み合わせた省力栽培、②全層客土による高畝栽培（粘質土壌の改善）③足場パイプ利用の防風ネットとスパイラル杭支柱による防風対策の３項目について実

証を行っている。また、栽培講習会や生育調査などにも活用している。

6　平成25年10月に農業試験場府中果樹研究所などと連携してオリーブ栽培圃場での土壌調査も行った。

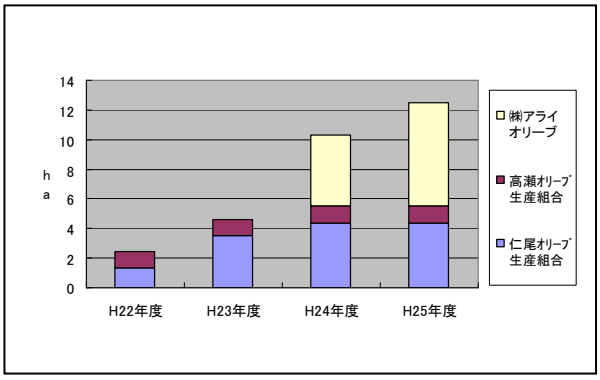
生育不良園では地下30㎝程度の浅い場所で粘土層が確認されたことから、土質の違いや地下水位の停滞による発根不良が生育不良の要因の一つと考えられた。このため、生育不良園での土壌改良の必要性や新植時にも圃場選定に注意が必要であることを再度生産者に情報提供した。

7　平成25年の栽培講習会や現地巡回時には三豊市と協力して各生産組合の代表者や組合員に「オリーブ加工・販売意向調査」を行い、オリーブの加工や販売についての生産組合としての意向を聞き取り、加工業者などに栽培状況や生産組合の意向について情報提供を行った。

●普及活動の成果

オリーブ栽培面積の拡大

1　オリーブ栽培意向をもつ農業者や企業などへの説明を行い、平成22年度に2.3ha、平成23年度に2.2ha、24年度に5.6haが植栽され、現在、仁尾町と高瀬町で約10.3haのオリーブが栽培されている。平成25年度も高瀬町で約2.2haの植栽が見込まれており、オリーブ栽培面積は12haを超える見込みとなっている。



図―1　オリーブ栽培面積の推移（H25 年度は見込み）

2　仁尾オリーブ生産組合での初収穫

平成 25 年 10 月に仁尾オリーブ生産組合では初めての収穫を行い、ミッションが 180.1kg、ネバディロ・ブランコが 47.6kg、ルッカが 58.0kg 収穫された。ミッションは漬物の原料として青果市場を通じて加工業者に、また、ネバディロ・ブランコとルッカは別の加工業者にオリーブオイルの原料として出荷された。

仁尾オリーブ生産組合で初めてオリーブが収穫・出荷されたことから、高瀬オリーブ生産組合でも今後の栽培管理への意欲が高まった。

3　実証ほでの成果

県オリーブ栽培実証ほでは県下に先がけた省力養液土耕栽培を行っている。現在の生育は概ね順調で、慣行に比べて株毎の生育差が少なく枝の徒長が少ない生育をしている。

●今後の普及活動の課題

1　生育不良園の土壌改良

オリーブの産地となるには栽培面積の拡大と安定的な出荷が必須と考えられる。

土壌調査の結果からは、オリーブの生育が良好な園でも一部には深さ35～40㎝程度に粘土層が確認され、今後の生育不良が懸念された。このため、園の粘土層位置の違いによる生育状況を比較して必要な有効土層を確認し、生育不良園では土壌改良や改植を実施して、早期の成園化による収益の確保・向上を図る必要があると考えられた。

2　モモとオリーブの混在園地での農薬ドリフト対策

高瀬町原下地区ではモモの圃場の中にオリーブの圃場が混在しており、相互の圃場への農薬飛散防止対策が早急に必要であるため、モモおよびオリーブ生産者の意向を調査して、それぞれの負担が少ない対策を協議する場を設けていく。

3　JAとの連携が不可欠

現在、香川県農業協同組合三豊地区果樹産地推進協議会が策定している「第二次果樹産地構造改革計画」には重点推進品目にオリーブが記載されおらず、オリーブの出荷・販売に当っては香川県農業協同組合三豊地区営農センターの協力・支援が得られていないため三豊市とともに連携を模索する。